

46389



PATENT

UNITED STATES PATENT AND TRADEMARK OFFICE

In re Application of :
Hideyuki KAWAI et al. :
Serial No.: 10/790,092 :
Filed: March 2, 2004 :
For: MICROCAPSULE AND ITS USES :

CLAIM FOR PRIORITY UNDER 35 U.S.C. § 119

Commissioner for Patents
P.O. Box 1450
Alexandria, VA 22313-1450

Sir:

Under the provisions of 35 U.S.C. § 119, there is filed herewith a certified copy of Japanese Application No. 2003-060500, filed March 6, 2003, in accordance with the International Convention for the Protection of Industrial Property, 53 Stat. 1748, under which Applicants hereby claim priority.

Respectfully submitted,

Garrett V. Davis
Reg. No. 32,023

Roylance, Abrams, Berdo & Goodman, L.L.P.
1300 19th Street, N.W., Suite 600
Washington, D.C. 20036
(202) 659-9076

Dated: August 23, 2004

0209105

日 本 国 特 許 庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出 願 年 月 日 2 0 0 3 年 3 月 6 日
Date of Application:

出 願 番 号 特 願 2 0 0 3 - 0 6 0 5 0 0
Application Number:
[ST. 10/C] : [J P 2 0 0 3 - 0 6 0 5 0 0]

願 人 セイコーエプソン株式会社
Applicant(s): 株式会社日本触媒

2 0 0 4 年 2 月 2 6 日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

今 井 康 夫

CERTIFIED COPY OF BEST AVAILABLE COPY
PRIORITY DOCUMENT

出証番号 出証特 2 0 0 4 - 3 0 1 4 0

【書類名】 特許願

【整理番号】 02091JP

【提出日】 平成15年 3月 6日

【あて先】 特許庁長官殿

【国際特許分類】 B01J 13/02
G09F 9/30

【発明の名称】 マイクロカプセルおよび電気泳動表示装置

【請求項の数】 5

【発明者】

【住所又は居所】 長野県諏訪市大和 3 丁目 3 番 5 号 セイコーエプソン株式会社内

【氏名】 川居 秀幸

【発明者】

【住所又は居所】 大阪府吹田市西御旅町 5 番 8 号 株式会社日本触媒内

【氏名】 阿南 和浩

【発明者】

【住所又は居所】 大阪府吹田市西御旅町 5 番 8 号 株式会社日本触媒内

【氏名】 松本 誠

【発明者】

【住所又は居所】 大阪府吹田市西御旅町 5 番 8 号 株式会社日本触媒内

【氏名】 串野 光雄

【特許出願人】

【識別番号】 000002369

【氏名又は名称】 セイコーエプソン株式会社

【特許出願人】

【識別番号】 000004628

【氏名又は名称】 株式会社日本触媒

【代理人】

【識別番号】 100073461

【弁理士】

【氏名又は名称】 松本 武彦

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 006552

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9712712

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 マイクロカプセルおよび電気泳動表示装置

【特許請求の範囲】

【請求項 1】

カプセル殻体に液状物質を内包してなるマイクロカプセルであって、前記カプセル殻体が粒子径 $1\ \mu\text{m}$ 以下の微粒子を含むことを特徴とする、マイクロカプセル。

【請求項 2】

前記微粒子が重合体微粒子である、請求項 1 に記載のマイクロカプセル。

【請求項 3】

前記液状物質が、溶媒中に電気泳動性微粒子を分散させてなる分散液である、請求項 1 または 2 に記載のマイクロカプセル。

【請求項 4】

請求項 1 から 3 までにいずれかに記載のマイクロカプセルとバインダー樹脂とを含んでなる層を有する、シート。

【請求項 5】

少なくとも一方が透明な対向電極フィルム間に、請求項 3 に記載のマイクロカプセルが配されてなる、電気泳動表示装置。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、隔壁層となるカプセル殻体に液状物質を内包してなるマイクロカプセルに関する。さらには、液状物質として、溶媒中に電気泳動性微粒子を分散させた分散液をカプセル殻体に内包してなるマイクロカプセルに関する。また、上記マイクロカプセルを用いたシート、および、上記マイクロカプセルを用いた電気泳動表示装置に関する。

【0002】

【従来の技術】

従来より、隔壁層となるカプセル殻体に、油性の液状物質（単なる溶液の他、

微粒子分散体なども含む)を内包してなるマイクロカプセルはよく知られており、ノンカーボン紙および圧力測定フィルムなどの各種シートや、電気泳動表示装置や、医薬品や農薬などのコントロールリリース剤などの各種用途において、その有用性が認められている。

通常、マイクロカプセルの隔壁であるカプセル殻体は非常に薄いため、芯(核)物質でもあり内包物でもある液状物質(特に液体成分)が、カプセル殻体外にブリードアウトするという現象がある。この現象を積極的に利用しているのが、上記コントロールリリース剤などである。一方、例えば、電気泳動表示装置用のマイクロカプセルなどのように、内包した液状物質をしっかりと保持する必要がある用途においては、上述したブリードアウトは、周辺汚染、マイクロカプセルの粉体特性の低減、マイクロカプセル同士の凝集、および、その基材等への接着性や密着性の低下・不良などという不具合を生じる原因となっており、問題となっていた。また、上記コントロールリリース剤などの用途に用いるマイクロカプセルにおいても、その使用時や使用後はともかく、その調製時、保存時および輸送時などの使用前においては、液状物質の内包状態を一定レベルで保持する必要がある。しかし、使用時を考慮した上で適度にブリードアウトの防止・抑制具合を調整することは容易なことではなかった。

【0003】

そこで、これら問題を解決する手段として、界面重合法と *In-situ* 重合法を組み合わせることによりカプセル殻体を二重構造にしてブリードアウトを防止する技術(例えば、特許文献1参照。)や、芯物質とカプセル殻体との境界部分にPVA(ポリビニルアルコール)層を設けることでブリードアウトに対する耐久性を向上させる技術(例えば、特許文献2参照。)が既に開示されているが、近年の技術水準や製品品質等から求められるレベルから鑑みれば十分な解決策になっていると言えるものではないし、その操作手順も容易といえるものではないため経済性や生産性にも劣る。

【0004】

また、マイクロカプセルにおいては、通常、各種用途および技術分野からの要請(柔軟性や密着性、さらにはカプセル内粒子への荷電のし易さ等の向上)もあ

り、上記同様、非常に薄いカプセル殻体とすることが求められているが、その代償として十分な機械的強度が得られないという問題があった。また、例えば、ノーカーボン紙や圧力測定フィルムなどの用途においては、最終的にカプセル殻体を破壊し内包物である液状物質を流出させることを目的とするものもあるが、これらにおいても、必要時以外に破壊してしまうという不具合を防ぐためには適度に機械的強度を持たせる必要があるがその調整は容易ではなかった。よって、非常に薄いカプセル殻体としながらも、その調製時等や各種用途への使用時や使用後などにおいて、攪拌や加圧などの外的負荷に対する機械的強度を容易に向上させ調整することは、従来から常に課題とされているうえ、近年の技術水準からみてもより優れたものが要求されている。

【0005】**【特許文献1】**

特開昭63-32560号公報

【0006】**【特許文献2】**

特開昭59-48773号公報

【0007】**【発明が解決しようとする課題】**

そこで、本発明の解決しようとする課題は、内包した液状物質のカプセル殻体からのブリードアウトの防止やその調整、および、マイクロカプセルの機械的強度の向上やその調整を、効果的かつ容易に達成することのできるマイクロカプセルを提供することにある。また、このマイクロカプセルを用いたシートおよび電気泳動表示装置を提供することにある。

【0008】**【課題を解決するための手段】**

本発明者は、上記課題を解決するため鋭意検討を行った。その結果、従来どおりのカプセル殻体の薄さ及びそれに起因する柔軟性や密着性といった機能、作用効果を維持しながらも、前述のブリードアウトを効果的に防止したり調整したりすることができ、合わせて機械的強度の向上や調整をも容易になし得るためには

、マイクロカプセルを構成しているカプセル殻体に微粒子を存在させればよいのではないかと考え、このような従来には見られなかった新規な技術によれば、上記課題を一挙に解決できることを確認して、本発明を完成した。

【0009】

また、上述のようにカプセル殻体に微粒子を含めるという新規技術においては、微粒子として特定の機能や物性を有するものを用いることによってマイクロカプセル自体にも同様の機能や物性を付与することができる。例えば、粘着性、密着性、剥離性、光学特性などを発揮し得るようにすることができる。よって、用途分野および最終製品等を考慮した上で、微粒子の種類やその使用量を適宜選択、設定すれば、所望の特性を有するマイクロカプセルを容易に得ることができる。

さらに驚くべきことに、上述のようにカプセル殻体に微粒子を含有させたものは、マイクロカプセルの濾過性が格段に向上することが判った。具体的にいうと、マイクロカプセル調製後の液からマイクロカプセルのみを単離する（固液分離する）場合には、通常、吸引濾過や自然濾過が行われるが、この濾過を完了するまでの所要時間が格段に短くなるのである。これに伴ってマイクロカプセルの生産性を飛躍的に向上させることができる。

【0010】

すなわち、本発明にかかるマイクロカプセルは、カプセル殻体に液状物質を内包してなるマイクロカプセルであって、前記カプセル殻体が粒子径 $1\ \mu\text{m}$ 以下の微粒子を含むことを特徴とする。

また、本発明にかかるシートは、本発明にかかるマイクロカプセルとバインダー樹脂とを含んでなる層を有することを特徴とする。

また、本発明にかかる電気泳動表示装置は、少なくとも一方が透明な対向電極フィルム間に、本発明にかかるマイクロカプセルが配されてなることを特徴とする。

【0011】

【発明の実施の形態】

以下、本発明にかかるマイクロカプセル、シートおよび電気泳動表示装置につ

いて詳しく説明するが、本発明の範囲はこれらの説明に拘束されることはなく、以下の例示以外についても、本発明の趣旨を損なわない範囲で適宜変更実施し得る。

本発明にかかるマイクロカプセルは、粒子径 $1\ \mu\text{m}$ 以下の微粒子を含んでなるカプセル殻体に、液状物質を内包してなるマイクロカプセルである。

本発明でいうカプセル殻体は微粒子を含むカプセル殻体であるが、この微粒子を除くカプセル殻体部分については、従来公知のマイクロカプセルにおけるカプセル殻体の原料と同様のものを用いて形成され得ることが好ましい。具体的に用いられるものとしては、例えば、コアセルベーション法を用いる場合では、アラビアゴム、アルギン酸ナトリウム、スチレン-無水マレイン酸共重合体、ビニルメチルエーテル-無水マレイン酸共重合体、デンプンのフタル酸エステル、ポリアクリル酸等のアニオン性物質が好適である。In-situ 重合法を用いる場合では、メラミン-ホルマリン樹脂（メラミン-ホルマリンプレポリマー）、ラジカル重合性モノマーなどが好適である。界面重合法を用いる場合では、ポリアミン、グリコール、多価フェノールなどの親水性モノマーと、多塩基酸ハライド、ビスハロホルメル、多価イソシアネートなどの疎水性モノマーとの組み合わせが好適であり、ポリアミド、エポキシ樹脂、ポリウレタン、ポリ尿素などのカプセル殻体が形成される。

【0012】

これらカプセル殻体の原料には、さらに多価アミン等を加えることもでき、耐熱保存性などに優れたカプセル殻体を有するマイクロカプセルを得ることができる。多価アミン等の使用量は、上記カプセル殻体の原料に起因する所望の殻体物性が極端に損なわれない程度であればよい。

上記多価アミンとしては、例えば、エチレンジアミン、ジエチレントリアミン、トリエチレンテトラミン、テトラエチレンペンタミン、1,3-プロピレンジアミン、ヘキサメチレンジアミン等の脂肪族アミンや、ポリ(1~5)アルキレン ($\text{C}_2\sim\text{C}_6$) ポリアミン・アルキレン ($\text{C}_2\sim\text{C}_{18}$) オキシド付加物等の脂肪族多価アミンのエポキシ化合物付加物、フェニレンジアミン、ジアミノナフタレン、キシリレンジアミン等の芳香族多価アミン、ピペラジン等の脂環式多価アミ

ン、3, 9-ビス-アミノプロピル 2, 4, 8, 10-テトラオキサスピロー [5, 5] ウンデカン等の複素環式ジアミン等を好ましく挙げることができる。これらは単独で用いても 2 種以上を併用してもよい。

【0013】

本発明でいうカプセル殻体に含まれる微粒子としては、特に限定はされないが、例えば、有機質微粒子、無機質微粒子、有機質無機質複合体微粒子などの各種微粒子を用いることができる。なかでも、電極基板などの各種基板や基材への接着性（固定具合い）や密着性等をより向上させることができる点で、有機質微粒子や有機質無機質複合体微粒子を用いた場合がより好ましい。また、微粒子以外のカプセル殻体部分を形成する物質と、親和性あるいは化学結合できる官能基を有する微粒子が好ましい。

上記有機質微粒子としては、例えば、重合体微粒子、有機顔料微粒子、天然高分子微粒子などを好ましく挙げることができる。なかでも基板や基材への密着性を確保する又は向上させる点で、重合体微粒子がより好ましい。

【0014】

重合体微粒子としては、例えば、ポリスチレン、ポリP-クロルスチレン、ポリビニルトルエン等のスチレン及びその置換体の単重合体；スチレン-P-クロルスチレン共重合体、スチレン-プロピレン共重合体、スチレン-ビニルトルエン共重合体、スチレン-ビニルナフタリン共重合体、スチレン-アクリル酸メチル共重合体、スチレン-アクリル酸エチル共重合体、スチレン-アクリル酸ブチル共重合体、スチレン-アクリル酸オクチル共重合体、スチレン-メタクリル酸メチル共重合体、スチレン-メタクリル酸エチル共重合体、スチレン-メタクリル酸ブチル共重合体、スチレン- α -クロルメタクリル酸メチル共重合体、スチレン-アクリロニトリル共重合体、スチレン-ビニルメチルエーテル共重合体、スチレン-ビニルエチルエーテル共重合体、スチレン-ビニルメチルケトン共重合体、スチレン-ブタジエン共重合体、スチレン-イソプレン共重合体、スチレン-アクリロニトリル-インデン共重合体、スチレン-マレイン酸共重合体、スチレン-マレイン酸エステル共重合体、スチレン-アクリル酸エステル-メタクリル酸エステル共重合体、スチレン-アクリル酸エステル-ジブチルフマレート

共重合体などのスチレン系多元共重合体；ポリメタクリレート、ポリブチルメタクリレート、ポリ塩化ビニル、ポリ酢酸ビニル、ポリメチルエチレン、ポリウレタン、ポリアミド、ポリエステル樹脂、ポリオレフィン、エポキシ樹脂、ポリビニルプチラール、ポリアクリル酸樹脂、ロジン、変性ロジン、テルペン樹脂、フェノール樹脂、脂肪族または脂環族炭化水素樹脂、芳香族系石油樹脂等からなる微粒子を挙げることができる。

【0015】

これら重合体微粒子を得る方法としては、特に限定はされないが、具体的には、例えば、乳化重合法、マイクロ懸濁重合法、あるいは、熔融樹脂を樹脂不溶性溶媒中で微粒子生成する方法などが有効である。また、これら重合体微粒子の樹脂特性は、特に限定はされないが、例えば、本発明のマイクロカプセルをバインダーに混合分散し塗料化して用いる場合は、そのバインダーと同物性の重合体微粒子を用いることで、塗布性および密着性が向上する効果が得られるため好ましい。

有機顔料微粒子としては、例えば、ファストイエロー、クロモフタルイエロー、ハンダイエロー、パーマネントレッド、パールレッド、クロモフタルスカーレット、フタロシアニンブルー、インダスレンブルー、フタロシアニングリーン、カーボンブラック、アニリンブラック等からなる微粒子を挙げることができる。

【0016】

上記無機質微粒子としては、例えば、無機顔料微粒子、コロイド状無機微粒子、磁性微粒子、金属微粒子などを好ましく挙げることができる。

無機顔料微粒子としては、例えば、タルク、酸化チタン、酸化亜鉛、クレー、シリカ、チタンイエロー、ベンガラ、セルリアンブルー、エメラルドグリーン等からなる微粒子を挙げることができる。

コロイド状無機微粒子としては、例えば、コロイダルシリカ、コロイダル酸化亜鉛、コロイダル酸化チタン等からなる微粒子を挙げることができる。

磁性微粒子としては、例えば、マグネタイト、 Fe_3O_4 、等からなる微粒子を挙げることができる。

【0017】

金属微粒子としては、例えば、金、銀、白金、銅、アルミニウム、タングステン、パラジウム等からなる微粒子を挙げることができる。

上記有機質無機質複合体微粒子としては、有機質由来の構造部分と無機質由来の構造部分とを有する複合粒子であればよく、特に限定はされない。

本発明でいうカプセル殻体を含む微粒子として上記列挙した各種微粒子は、1種のみ用いてもよいし2種以上を併用してもよい。

また、カプセル殻体を含む微粒子としては、上記列挙した各種微粒子であり且つその表面をカップリング剤や官能基を有するポリマーで処理したものをを用いることもできる。

【0018】

カップリング剤としては、例えば、シランカップリング剤、チタネート系カップリング剤、アルミニウム系カップリング剤等が好ましい。

本発明でいうカプセル殻体を含む微粒子は、粒子径が $1\mu\text{m}$ 以下の微粒子であるが、好ましくは $0.001\sim 0.8\mu\text{m}$ 、より好ましくは $0.01\sim 0.5\mu\text{m}$ である。上記粒子径が $1\mu\text{m}$ 以下であることにより、マイクロカプセルの強度を容易に効果的に向上させることができる。また、 $1\mu\text{m}$ を超える場合は、前述した効果を発揮させ得る量をマイクロカプセル殻体に含ませることができず、十分な効果が得られない、また、マイクロカプセルの強度が低下するおそれがある。

【0019】

本発明のマクロカプセルでいうカプセル殻体において、カプセル殻体全体中の微粒子の含有割合は、特に限定はされないが、 $0.1\sim 50$ 重量%であることが好ましく、より好ましくは $0.5\sim 50$ 重量%、さらに好ましくは $1\sim 50$ 重量%である。上記微粒子の含有割合が 0.1 重量%未満であると、前述した効果が十分に得られないおそれがあり、 50 重量%を超える場合は、通常マイクロカプセルとして要求される物性を保持することができなくなるおそれがある。

本発明のマイクロカプセルでいうカプセル殻体の厚み（微粒子を含む状態での厚み）は、特に限定はされないが、 $0.1\sim 5\mu\text{m}$ であることが好ましく、より好ましくは $0.1\sim 4\mu\text{m}$ 、さらに好ましくは $0.1\sim 3\mu\text{m}$ である。上記厚み

が0.1 μm 未満である場合は、カプセル殻体に微粒子を含有させてもその効果が十分に得られないおそれがあり、5 μm を超える場合は、通常マイクロカプセルとして要求される物性を保持することができなくなる、または、微粒子を含有させたことによる効果が十分得られず経済性に劣ることとなるおそれがある。

【0020】

本発明のマイクロカプセルでいうカプセル殻体については、含有させている微粒子がカプセル殻体表面上に露出している部分があってもよいし、微粒子はすべてカプセル殻体内に包埋された状態となってもよく、特に限定はされない。

本発明でいう液状物質は、微粒子を含むカプセル殻体に内包され本発明のマイクロカプセルの芯（核）物質となるものであるが、単に1種または2種以上の液体または混合液体であってもよいし、それら液体が固体物質を溶解させてなる溶液またはスラリー溶液であってもよく、特に限定はされない。また、それら液体や溶液に微粒子等（例えば電気泳動性微粒子など）の固体物質を分散させてなるもの（いわゆる分散体）であってもよいし、混合させてなるもの（いわゆる混合物）でもよい。上記分散体としての液状物質は、例えば、電気泳動表示装置用のマイクロカプセルを得る場合に用いられる。

【0021】

上記液状物質の調製においては、用いる液体や固体物質の種類および数などは、得られるマイクロカプセルの用途分野や最終製品で要求される機能などを考慮して適宜選択すればよく、特に限定はされない。

液状物質は、全体として油性であり水系媒体中で油滴を形成して分散し得るのが好ましい。

以下、電気泳動表示装置用のマイクロカプセルを得る場合に用いる液状物質、すなわち、溶媒中に電気泳動性微粒子を分散させてなる分散液について、具体的に例を挙げて説明する。

【0022】

通常、電気泳動表示には、分散液中の溶媒の色と電気泳動性微粒子の色とのコントラストで表示する方法と、少なくとも2種の電気泳動性微粒子の色のコントラストで表示する方法がある。

上記分散液に用いる溶媒としては、通常一般的に電気泳動表示装置用分散液として用いられている溶媒であればよく、特に限定はされないが、高絶縁性の有機溶媒が好ましい。

高絶縁性の有機溶媒としては、例えば、*o*-、*m*-または *p*-キシレン、トルエン、ベンゼン、ドデシルベンゼン、ヘキシルベンゼン、フェニルキシリルエタン、ナフテン系炭化水素などの芳香族系炭化水素類；シクロヘキサン、*n*-ヘキサン、ケロシン、パラフィン系炭化水素などの脂肪族炭化水素類などの単独またはそれらの混合物が好ましく挙げられ、なかでも、ドデシルベンゼンおよびヘキシルベンゼン等の長鎖アルキルベンゼンおよびフェニルキシリルエタン等が、沸点および引火点も高く、また毒性もほとんど無いことからより好ましい。これら溶媒は、1種のみ用いても2種以上を併用してもよい。

【0023】

溶媒を着色する場合は、電気泳動性微粒子の色（例えば、酸化チタン微粒子であれば白色）に対して十分なコントラストが得られる程度に着色することがより好ましい。

溶媒が着色されたものである場合、着色に用いられる染料としては、特に限定はされないが、油溶性染料が好ましく、特に使いやすさの点で、アゾ染料およびアントラキノン染料などがより好ましい。具体的には、黄色系染料としては、オイルイエロー 3 G（オリエント化学社製）等のアゾ化合物類が、橙色系染料としては、ファーストオレンジ G（BASF 社製）等のアゾ化合物類が、青色系染料としては、マクロレックスブルー RR（バイエル社製）等のアンスラキノン類が、緑色系染料としては、スミプラストグリーン G（住友化学社製）等のアンスラキノン類が、茶色系染料としては、オイルブラウン GR（オリエント化学社製）等のアゾ化合物類が、赤色系染料としては、オイルレッド 5303（有本化学社製）およびオイルレッド 5 B（オリエント化学社製）等のアゾ化合物類が、紫色系染料としては、オイルバイオレット # 730（オリエント化学社製）等のアンスラキノン類が、黒色系染料としては、スーダンブラック X 60（BASF 社製）等のアゾ化合物や、アンスラキノン系のマクロレックスブルー FR（バイエル社製）とアゾ系のオイルレッド XO（カントー化学社製）との混合物が、好まし

く挙げられる。これら染料は1種のみ用いても2種以上を併用してもよい。

【0024】

上記分散液に用いる電気泳動性微粒子は、電気泳動性のある顔料粒子、つまり、分散液中で正または負の極性を示す着色粒子であればよい。その種類としては、特に限定されるわけではないが、具体的には、酸化チタン等の白色粒子や、カーボンブラックおよびチタンブラック等の黒色粒子などが好ましく用いられ、また後述するような他の粒子を用いてもよい。これらは1種のみ用いても2種以上併用してもよい。

酸化チタンの微粒子を用いる場合、酸化チタンの種類は、特に限定されず、一般に白色顔料として使用されるものであればよく、ルチル型でもアナターゼ型でもよいが、酸化チタンの光活性性能による着色剤の退色等を考えた場合、光活性性能の低いルチル型であることが好ましく、さらに光活性性能を低減させるためのSi処理、Al処理、Si-Al処理あるいはZn-Al処理等を施された酸化チタンであればより好ましい。

【0025】

電気泳動性微粒子としては、上記酸化チタン微粒子、カーボンブラックおよびチタンブラック以外の他の粒子を併用してもよく、また、該他の粒子を酸化チタン等の代わりに使用してもよい。他の粒子は、酸化チタン微粒子等と同様に顔料粒子であることが好ましい。また、他の粒子は、酸化チタン微粒子等と同様に電気泳動性を有する必要性は必ずしも無く、必要であれば、電気泳動性を従来公知の何らかの方法により付与すればよい。

上記他の粒子としては、特に限定されるわけではないが、具体的には、例えば、白色系のものでは、上記酸化チタン以外では、硫酸バリウム、酸化亜鉛、亜鉛華等の無機顔料；黄色系のものでは、黄色酸化鉄、カドミウムイエロー、チタンイエロー、クロムイエローおよび黄鉛等の無機顔料や、ファーストイエロー等の不溶性アゾ化合物類、クロモフタルイエロー等の縮合アゾ化合物類、ベンズイミダゾロンアゾイエロー等のアゾ錯塩類、フラバンスイエロー等の縮合多環類、ハンザイエロー、ナフトールイエロー、ニトロ化合物およびピグメントイエロー等の有機顔料；橙色系のものでは、モリブデートオレンジ等の無機顔料や、ベンズ

イミダゾロンアゾオレンジ等のアゾ錯塩類およびベリノンオレンジ等の縮合多環類等の有機顔料；赤色系のものでは、ベンガラおよびカドミウムレッド等の無機顔料や、マダレーキ等の染色レーキ類、レーキレッド等の溶解性アゾ化合物類、ナフトールレッド等の不溶性アゾ化合物類、クロモフタルスカーレッド等の縮合アゾ化合物類、チオインジゴボルドー等の縮合多環類、シンカシヤレッドYおよびホスタパームレッド等のキナクリドン顔料、パーマネントレッドおよびファーストスローレッド等のアゾ系顔料等の有機顔料；紫色系のものでは、マンガンバイオレット等の無機顔料や、ローダミンレーキ等の染色レーキ類、ジオキサジンバイオレット等の縮合多環類等の有機顔料；青色系のものでは、紺青、群青、コバルトブルーおよびセルリアンブルー等の無機顔料や、フタロシアニンブルー等のフタロシアニン類、インダンスレンブルー等のインダンスレン類、アルカリブルー等の有機顔料；緑色系のものでは、エメラルドグリーン、クロームグリーン、酸化クロムおよびビリジアン等の無機顔料や、ニッケルアゾイエローなどのアゾ錯塩類、ピグメントグリーンおよびナフトールグリーン等のニトロソ化合物類、フタロシアニングリーン等のフタロシアニン類等の有機顔料；黒色系のものでは、上記カーボンブラックやチタンブラック以外では、鉄黒などの無機顔料や、アニリンブラック等の有機顔料；などが好ましく挙げられる。これらは1種のみ用いても2種以上を併用してもよい。

【0026】

電気泳動性微粒子の粒子径は、特に限定されるわけではないが、体積平均粒子径が、 $0.1 \sim 5 \mu\text{m}$ であることが好ましく、より好ましくは $0.2 \sim 3 \mu\text{m}$ である。上記粒子径（体積平均粒子径）が、 $0.1 \mu\text{m}$ 未満の場合は、電気泳動表示装置の表示部分において十分な隠蔽性が得られず着色度が低下し、コントラスト性の高い電気泳動表示装置が得られないおそれがあり、 $5 \mu\text{m}$ を超える場合は、粒子自体の着色度を必要以上に高くする（顔料濃度を高くする）必要性が生じる他、微粒子のスムーズな電気泳動特性が低下するおそれもある。

上記分散液中には、上述した溶媒および電気泳動性微粒子以外にも必要に応じて何らかの他の成分を含むことができるが、その種類などは特に限定されるわけではない。上記他の成分としては、例えば、分散剤などが挙げられる。分散剤は

、溶媒中に電気泳動性微粒子を分散させる前から含むようにしても、分散させた後に含むようにしてもよく、特に限定はされない。

【0027】

分散剤としては、特に限定されないが、通常一般的に、溶媒中における粒子の分散を補助するために用いることのできる分散剤であればよく、具体的には、例えば、分散液に溶解可能な陰イオン界面活性剤、陽イオン界面活性剤、両性界面活性剤、非イオン性界面活性剤、フッ素系界面活性剤、ソルビタンセスキオレートなどのソルビタン脂肪酸エステル界面活性剤、ブロック型ポリマーおよびグラフト型ポリマーなどの分散剤や、各種カップリング剤などを好ましく挙げることができ、これらは単独で用いても2種以上を併用してもよい。上記分散剤のなかでも、カップリング剤が電荷を印加した際の分散安定性も良好となるのでより好ましい。微粒子をカップリング剤で処理すれば、微粒子表面にカップリング剤の被覆層が形成される。

【0028】

上記カップリング剤としては、その種類は特に限定されるわけではなく、例えば、①シランカップリング剤、②チタネート系カップリング剤、③アルミニウム系カップリング剤、④ビニル基を有するカップリング剤、⑤アミノ基、第四級アンモニウム塩、カルボキシル基およびリン酸基から選ばれる少なくとも1つの基を有するカップリング剤、⑥末端にアミノ基またはグリシジル基を有するカップリング剤、⑦オルガノジシラザンなどを好ましく挙げることができ、より好ましくはチタネートカップリング剤およびアルミニウム系カップリング剤であり、さらに好ましくは上記各種カップリング剤であって長鎖アルキル基をも有するカップリング剤であり、特に好ましくは長鎖アルキル基をも有するチタネートカップリング剤や長鎖アルキル基をも有するアルミニウム系カップリング剤である。上記カップリング剤は、単独で用いても2種以上併用してもよい。

【0029】

上述のように、長鎖アルキル基を有するカップリング剤が好ましい理由としては、安全性の高い溶剤である長鎖アルキルベンゼン等により親和性が高くなるために電気泳動性微粒子の分散安定性を高める効果が高い、ということ等を挙げる

ことができる。

上記分散液を得る場合に、溶媒中に電気泳動性微粒子を分散させる方法としては、特に限定はされないが、通常、何らかの溶媒中に所望の粒子を分散させる際に用いられる方法であればよい。具体的には、例えば、超音波浴槽内に原料成分である電気泳動性微粒子、溶媒およびカップリング剤などを仕込み、攪拌しながら超音波分散する方法や、ペイントシェーカー、ボールミル、サンドグラインドミルなどの分散機を用いて分散する方法、Vブレンダーなどで溶媒および微粒子を強制攪拌しながらカップリング剤を乾燥空気や窒素ガスで噴霧させる乾式法、微粒子を溶媒に適当に分散させスラリー状となったところにカップリング剤を添加する湿式法、予め加温した溶媒および微粒子を激しく攪拌しながらカップリング剤をスプレーするスプレー法などを好ましく挙げることができる。

【0030】

本発明のマイクロカプセルの形状は、特に限定はされないが、球状等の粒子状であることが好ましい。

本発明のマイクロカプセルの粒子径は、特に限定はされないが、具体的には、 $1 \sim 1000 \mu\text{m}$ であることが好ましく、より好ましくは $5 \sim 800 \mu\text{m}$ 、さらに好ましくは $10 \sim 500 \mu\text{m}$ である。マイクロカプセルの粒子径が $1 \mu\text{m}$ 未満である場合は、マイクロカプセルに内包する量が少なくなりカプセル化する効果が少なくなるおそれがあり、 $1000 \mu\text{m}$ を超える場合は、通常マイクロカプセルとして要求される物性を保持することができなくなる、または、マイクロカプセルの強度を制御することが困難になるおそれがある。

【0031】

本発明のマイクロカプセルを製造するにあたっては、マイクロカプセル化工程を含む通常公知の製造方法、具体的には、例えば、コアセルベーション法（相分離法）、液中乾燥法、融解分解冷却法、スプレードライイング法、パンコーティング法、気中懸濁被覆法および粉床法等のいわゆる界面沈積法や、界面重合法、*In-situ*重合法、液中硬化被膜（被覆）法（オリフィス法）および界面反応法（無機化学反応法）等のいわゆる界面反応法を好ましく用いることができる。なかでも、コアセルベーション法、*In-situ*重合法、界面重合法、液中乾

燥法、融解分解冷却法がより好ましい。そして、これら各種製造方法のマイクロカプセル化工程では、カプセル殻体に内包される芯物質として前述した液状物質を用い、通常公知のカプセル殻体原料に前述の微粒子を含有させたものを本発明でいうカプセル殻体の原料として用いるようにする。このような方法であれば本発明のマイクロカプセルを極めて容易に得ることができるため好ましい。

【0032】

マイクロカプセル化工程において、通常公知のカプセル殻体原料に微粒子を含有させたものをカプセル殻体原料として用いる場合、その原料全体中の微粒子の含有割合は、得られたマイクロカプセルのカプセル殻体における微粒子の含有割合が前述の範囲となるように適宜設定すればよく、特に限定はされないが、例えば、0.01～5重量%としておくことが好ましく、より好ましくは0.05～5重量%、さらに好ましくは0.1～5重量%である。上記範囲外であると、得られたマイクロカプセルのカプセル殻体における微粒子含有割合が前述した範囲内とならないおそれがある。

【0033】

マイクロカプセル化工程を行うにあたっては、本発明でいう液状物質を芯物質としての状態（例えば液滴状の形態）にする必要があるが、その方法としては、気相中で噴霧や滴下等を行ったりオリフィス等を用いたりして液滴状にしてもよいし、水系媒体または非水系媒体中で分散させることにより液滴状にしてもよく、特に限定はされない。

例えば、液状物質を水系媒体に分散させる際は、水系媒体としては、特に限定はされないが、水や、水と親水性溶剤（アルコール、ケトン、エステル、グリコールなど）との混合液、水に水溶性高分子（PVA（ポリビニルアルコール）、CMC（カルボキシメチルセルロース）、ゼラチン、アラビアゴムなど）を溶解させた溶液、水に界面活性剤（アニオン性界面活性剤、カチオン性界面活性剤、ノニオン性界面活性剤など）を添加した溶液、または、これら水系媒体を複合した液などを好ましく用いることができる。また、液状物質を水系媒体に分散させる量は、特に限定はされないが、具体的には、水系媒体100重量部に対して、該液状物質を20～200重量部用いることが好ましく、より好ましくは30～

150重量部である。20重量部未満であると、結果的に粒径分布の広いマイクロカプセルとなり、生産効率の低下を招くおそれがあり、200重量部を超える場合は、逆懸濁液となりマイクロカプセルが製造できなくなるおそれがある。

【0034】

マイクロカプセル化工程において、微粒子を含むカプセル殻体原料の使用量は、特に限定はされないが、具体的には、芯物質として使用する液状物質1重量部に対して、1～50重量部とすることが好ましく、より好ましくは5～30重量部である。該使用量が上記範囲外であると、得られるマイクロカプセルにおけるカプセル殻体の厚みが前述した範囲内にならないおそれがある。

マイクロカプセル化工程を行う際には、微粒子を含むカプセル殻体原料、液状物質、および必要に応じて用いる水系媒体や非水系媒体の他にも、適宜他の成分を用いてもよい。

【0035】

マイクロカプセル化工程によりマイクロカプセルを調製した後、必要に応じてマイクロカプセルを濾過等により単離する。例えば、液状物質を水系媒体などに分散させてマイクロカプセル化工程を行った場合は、マイクロカプセル調製後、吸引濾過や自然濾過にて該マイクロカプセルを水系媒体等から分離するが、本発明のマイクロカプセルを濾過する場合は、上記濾過の所要時間を格段に短縮することができ、ひいては経済性、生産性に大きなメリットとなる。

単離後は、通常公知の方法により、所望の粒径分布となるようにマイクロカプセルを分級することが好ましい。

【0036】

また、不純物を除去し、製品品質を向上させるため、得られたマイクロカプセルを洗浄する操作を行うことも好ましい。

本発明のマイクロカプセルは、例えば、マイクロカプセル化液晶、カプセル型接着剤、カプセル型化粧品、マイクロカプセル型電気泳動表示装置、マイクロカプセル型液晶表示装置等の各種用途や製品に好ましく用いることができる。その他、従来公知の各種用途や製品にも好ましく用いることができる。

例えば、本発明のマイクロカプセルをカプセル型接着剤に用いる場合は、感圧

カプセルシステム、感熱カプセルシステム、反応性カプセルシステムなどの接着剤に利用でき、非粘着性の乾燥面が得られ、フィルム化することができる。このようにカプセル型接着剤に本発明のマイクロカプセルを用いることによって、フィルム化する際の塗工工程での割れやブリードアウト等の問題もなく、保存安定性などでも優れた効果を得ることができる。

【0037】

本発明にかかるシートは、上記本発明のマイクロカプセルとバインダー樹脂とを含んでなる層を有するシートである。該シートは、上記本発明のマイクロカプセルとバインダー樹脂とを含んでなる層のみからなるシートであってもよいし、この層を何らかのフィルム状やシート状基材とともにシート化したものであってもよく、特に限定はされないが、調製方法が容易であることやマイクロカプセルの特性を容易に保持したまま調製することができるなどの理由から後者の形態が好ましい。

本発明のシートの調製方法としては、例えば、上記本発明のマイクロカプセルとバインダー樹脂とを混合して塗料化し、フィルム状やシート状基材の表面に塗工して乾燥させて得る方法が挙げられる。

【0038】

上記調製方法においては、塗料化した際の塗料中のマイクロカプセル濃度は、特に限定はされないが、30～70重量%であることが好ましく、より好ましくは30～60重量%、さらに好ましくは30～55重量%である。マイクロカプセル濃度が上記範囲内であることによって、例えば、本発明のシートを電気泳動表示装置に用いた場合に、電極フィルム上にマイクロカプセルを1層で緻密に配置されたものを得ることができ、優れた製品品質を達成できる。

また、上記塗料の粘度は、500～5000 mPa・sであることが好ましく、より好ましくは800～4000 mPa・s、さらに好ましくは800～3000 mPa・sである。塗料の粘度が上記範囲であることによって、基材にマイクロカプセルを一層に隙間なく配することができ、緻密な充填状態のマイクロカプセルの塗工膜に仕上がる、といった効果が得られる。

【0039】

上記調製方法においては、必要に応じ、粘度調整剤、レベリング剤などを用いてもよい。

上記塗料を基材に塗工する方法としては、特に限定はされないが、例えば、アプリケーション、ブレードコーター等を用いて基材 1 枚 1 枚に塗工する方法であってもよいし、マルチコーター等の連続塗工機を用いて基材に連続塗工する方法であってもよく、適宜必要に応じ選択すればよい。

従来からも、上で例示したような調製方法によりマイクロカプセルを用いたシートが得られ、種々の用途に用いられているが、従来においては、マイクロカプセルとバインダー樹脂とを混合し塗料化する際、または、塗料化したものを塗工する際に、塗料供給ポンプあるいはコーター等による攪拌衝撃や摩擦圧などの外的負荷により、マイクロカプセルの損傷や破壊が頻発していた。また内包した液状物質のブリードアウトが過剰に若しくは必要以上に生じてしまうこともあった。しかしながら、本発明のシートにおいては、それらの問題を解消し得る上記本発明のマイクロカプセルを用いているため、上述した外的負荷にも強く、マイクロカプセルの損傷や破壊が極めて少なく、塗工時のトラブル発生を飛躍的に低減できる。

【0040】

本発明のシートは、ノンカーボン紙や圧力測定フィルムなどの、マイクロカプセルを用いた従来公知のシートと同様の用途に用いることができる。また、電気泳動表示装置を作成する場合にも好ましく用いることができる。

本発明のシートを電気泳動表示装置に用いる場合は、該シートを 2 枚の対向電極フィルムでラミネートしてもよいし、予め一方の電極フィルムを基材として塗工することで本発明のシートを得ておいて、これにもう一方の電極フィルムをラミネートするようにしてもよく、特に限定はされない。上記電極フィルムとしては、透明電極フィルム（例えばITO付きPETフィルム）を用いることが好ましい。

【0041】

本発明にかかる電気泳動表示装置は、少なくとも一方が透明な対向電極フィルム間に、前述した電気泳動表示装置用のマイクロカプセル（すなわち、上記本発

明のマイクロカプセルであって、カプセル殻体に内包されている液状物質が「溶媒中に電気泳動性微粒子を分散させてなる分散液」であるマイクロカプセル)が、配されてなるものである。該電気泳動表示装置の対向電極間に、制御された電圧を印加することで、マイクロカプセル中の電気泳動性微粒子の分散状態を変え、光学的反射特性に変化を与え、所要の表示動作を行わせる。

本発明の電気泳動表示装置を作成する場合は、前述した電気泳動表示装置用のマイクロカプセルをバインダーポリマー等と混合して塗料化した後、電極フィルムに塗工し、その後別の電極フィルムをもってマイクロカプセルを配した塗工面をラミネートするという方法が好ましく挙げられる。また、マイクロカプセルをバインダーポリマー等と混合してシート化したものや、該混合後にフィルム状の基材に塗工して得られたシートを、対向する2枚の電極フィルムによってラミネートする方法も挙げられる。何れの方法においても、対向する電極フィルムは、その少なくとも一方が透明電極（例えばITO付きPETフィルム）であることが必要とされる。

【0042】

通常、安定した優れた表示品質の電気泳動表示装置を得るためには、マイクロカプセルを電極フィルムに密着させる必要がある。電極との密着性が低いと、電気泳動性微粒子の応答性の低下や、コントラストの低下等が生じるからである。この密着性を高めるためには、通常、ラミネート時の温度や圧力を高くする必要があるが、従来はこのような高い温度や圧力によってマイクロカプセルが損傷したり破壊したりしていた。また、内包した液状物質が、過剰に若しくは必要以上にブリードアウトすることがあった。マイクロカプセルの損傷や破壊またはブリードアウトは、電気泳動表示装置の表示の欠落など、画質の著しい低下の原因となる。しかしながら、本発明の電気泳動表示装置においては、上記本発明の電気泳動表示装置用のマイクロカプセル、すなわち、カプセル殻体に特定粒子径の微粒子を含む電気泳動表示装置用マイクロカプセルを用いるものであるため、ラミネート時のマイクロカプセルの損傷や破壊またはブリードアウトを格段に低減することができる。さらに、上記微粒子としてその材質や物性を適宜必要に応じて選択することによって、電極フィルムとの密着性をより一層高めることができる。

ので、その場合は、温度や圧力などの諸条件をより緩やかにした状態でも優れた密着性を有するようにラミネートすることができる。

【0043】

本発明の電気泳動表示装置においては、用いるマイクロカプセルの粒子径は、特に限定はされないが、 $30 \sim 200 \mu\text{m}$ であることが好ましく、より好ましくは $50 \sim 150 \mu\text{m}$ である。

本発明の電気泳動表示装置において、対向する電極フィルム間のクリアランスは、特に限定はされないが、 $30 \sim 150 \mu\text{m}$ であることが好ましく、より好ましくは $30 \sim 120 \mu\text{m}$ である。

【0044】

【実施例】

以下に、実施例により、本発明をさらに具体的に説明するが、本発明はこれらにより何ら限定されるものではない。なお、以下では、便宜上、「重量部」を単に「部」と記すことがある。また、「重量%」を単に「wt%」と、「リットル」を単に「L」と記すことがある。

－実施例1－

ハイゾール SAS 296（日本石油化学社製） 100 g に、アントラキノンの青色オイル染料 6 g を溶解させ、青色に着色された疎水性液（1）を得た。

【0045】

予め、水 60 g にアラビアゴム 3 g およびゼラチン 6 g を溶解させておき、 43°C に保持された水溶液に、 50°C にした疎水性液（1） 106 g をディスパー（特殊機化工業社製、製品名：ROBOMICS）攪拌下に添加し、攪拌速度を徐々に上げ、 1050 rpm で 60 分間攪拌し、懸濁液を得た。

この懸濁液に、 43°C の温水 300 mL およびカプセル殻体となるエマルション（第一工業製薬（株）製、製品名：SuperFlex 700（粒子径 90 nm 、固形分 35% ）） 7.8 g を添加しながら攪拌速度も徐々に下げ、 500 rpm とした。さらに $10\% \text{ Na}_2\text{CO}_3$ 0.75 mL を添加した後、 30 分間保持した。

【0046】

30分間保持後、11mLの10%酢酸溶液を25分間かけて定量添加した後、10℃以下に冷却した。

冷却状態で2時間保持した後、37%ホルマリン3mLを添加し、さらに10%Na₂CO₃22mLを25分間かけて定量添加した。

その後、攪拌をしながら常温に戻し、20時間放置して熟成を行い、マイクロカプセル(1)の分散体を得た。

このマイクロカプセル(1)の粒子径を、レーザー回折／散乱式粒度分布測定装置(堀場製作所社製、製品名:LA-910)で測定した結果、体積平均粒子径が67μmであった。

【0047】

－実施例2－

実施例1においてハイゾールSAS296をアルキルベンゼンに代えた以外は、実施例1と同様の操作により、青色に着色された疎水性液(2)を得た。

予め、水100gにアラビアゴム6gおよびゼラチン9gを溶解させておき、43℃に保持された水溶液に、50℃にした疎水性液(2)106gをホモミキサー(特殊機化工業社製、製品名:ROBOMICS)攪拌下に添加し、攪拌速度を徐々に上げ、3000rpmで30分間攪拌し、懸濁液を得た。

この懸濁液に、43℃の温水300mLおよびカプセル殻体となるアクリル系エマルション(粒子径450nm、固形分45%)14gを添加しながら攪拌速度も徐々に下げ、1000rpmとした。攪拌をパドル攪拌に変え、全体が均一に十分攪拌されている状態で、さらに10%Na₂CO₃0.75mLを添加した後、30分間保持した。

【0048】

30分間保持後、15mLの10%酢酸溶液を30分間かけて定量添加した後、10℃以下に冷却した。

冷却状態で2時間保持した後、37%ホルマリン5mLを添加し、さらに10%Na₂CO₃24mLを25分間かけて定量添加した。

その後、攪拌をしながら常温に戻し、20時間放置して熟成を行い、マイクロカプセル(2)の分散体を得た。

このマイクロカプセル (2) の粒子径を、実施例 1 と同様の方法で測定した結果、体積平均粒子径が $23\ \mu\text{m}$ であった。

【0049】

－比較例 1－

実施例 1 においてアラビアゴムを 3 g 用いるところを 6 g 用いるようにし、カプセル殻体となるエマルション (第一工業製薬 (株) 製、製品名: Super Flex 700) を用いなかった以外は、実施例 1 と同様の操作により、マイクロカプセル (c 1) の分散体を得た。

このマイクロカプセル (c 1) の粒子径を、実施例 1 と同様の方法で測定した結果、体積平均粒子径が $65\ \mu\text{m}$ であった。

－比較例 2－

実施例 2 においてアラビアゴムを 6 g 用いるところを 9 g 用いるようにし、カプセル殻体となるアクリル系エマルション (粒子径 $450\ \text{nm}$ 、固形分 45%、) を用いなかった以外は、実施例 2 と同様の操作により、マイクロカプセル (c 2) の分散体を得た。

【0050】

このマイクロカプセル (c 2) の粒子径を、実施例 1 と同様の方法で測定した結果、体積平均粒子径が $21\ \mu\text{m}$ であった。

－実施例 3－

500 mL の 4 つ口フラスコに酸化チタン (石原産業社製、製品名: タイペーク CR-97) 30 g、アルキルベンゼン 261 g にチタネート系カップリング剤 (味の素社製、製品名: プレリアクト TTS) 2 g を仕込み、攪拌混合した後、 55°C の超音波浴槽 (ヤマト社製、製品名: BRANSON 5210) に入れ、攪拌しながら超音波分散を 2 時間行い、酸化チタン分散液を得た。

【0051】

この酸化チタン分散液に、アントラキノン系の青色オイル染料 6 g を溶解させ、青色に着色された電気泳動性微粒子分散液 (3) を得た。

予め、水 60 g にアラビアゴム 5.5 g およびゼラチン 5.5 g を溶解させておき、 43°C に保持された水溶液に、 55°C にした電気泳動性微粒子分散液 (3

) 105 g をデイスパー (特殊機化工業社製、製品名: ROBOMICS) 攪拌下に添加し、攪拌速度を徐々に上げ、1300 rpm で 60 分間攪拌し、懸濁液を得た。

この懸濁液に、43℃の温水 300 mL およびカプセル殻体となるエマルション (第一工業製薬 (株) 製、製品名: SuperFlex 700 (粒子径 90 nm、固形分 35%、体積固有抵抗 $2.5 \times 10^{10} \Omega \cdot \text{cm}$)) 7.8 g を添加しながら攪拌速度も徐々に下げ、500 rpm とした。さらに 10% Na_2CO_3 0.75 mL を添加した後、30 分間保持した。

【0052】

30 分間保持後、11 mL の 10% 酢酸溶液を 25 分間かけて定量添加した後、10℃以下に冷却した。

冷却状態で 2 時間保持した後、37% ホルマリン 3 mL を添加し、さらに 10% Na_2CO_3 2.2 mL を 25 分間かけて定量添加した。

その後、攪拌をしながら常温に戻し、20 時間放置して熟成を行い、電気泳動性微粒子分散液 (3) を内包した電気泳動表示装置用マイクロカプセル (3) の分散体を得た。

この電気泳動表示装置用マイクロカプセル (3) の粒子径を、レーザー回折／散乱式粒度分布測定装置 (堀場製作所社製、製品名: LA-910) で測定した結果、体積平均粒子径が $68 \mu\text{m}$ であった。

【0053】

－実施例 4－

実施例 1 においてアルキルベンゼンをハイゾール SAS 296 に代えた以外は、実施例 1 と同様の操作により、青色に着色された電気泳動性微粒子分散液 (4) を得た。

予め、水 100 g にアラビアゴム 6 g およびゼラチン 9 g を溶解させておき、43℃に保持された水溶液に、50℃にした電気泳動性微粒子分散液 (4) 106 g をデイスパー (特殊機化工業社製、製品名: ROBOMICS) 攪拌下に添加し、攪拌速度を徐々に上げ、1050 rpm で 30 分間攪拌し、懸濁液を得た。

【0054】

この懸濁液に、43℃の温水300mLおよびカプセル殻体となるエマルション（第一工業製薬（株）製、製品名：Super Flex 300（粒子径70nm、固形分30%、体積固有抵抗 $2.3 \times 10^8 \Omega \cdot \text{cm}$ ））17gを添加しながら攪拌速度も徐々に下げ、1000rpmとした。攪拌をパドル攪拌に変え、全体が均一に十分攪拌されている状態で、さらに10%Na₂CO₃0.75mLを添加した後、30分間保持した。

30分間保持後、15mLの10%酢酸溶液を30分間かけて定量添加した後、10℃以下に冷却した。

【0055】

冷却状態で2時間保持した後、37%ホルマリン5mLを添加し、さらに10%Na₂CO₃24mLを25分間かけて定量添加した。

その後、攪拌をしながら常温に戻し、20時間放置して熟成を行い、電気泳動性微粒子分散液（4）を内包した電気泳動表示装置用マイクロカプセル（4）の分散体を得た。

この電気泳動表示装置用マイクロカプセル（4）の粒子径を、実施例1と同様の方法で測定した結果、体積平均粒子径が95μmであった。

－比較例3－

実施例1においてアラビアゴムを5.5g用いるところを6g用いるようにし、カプセル殻体となるエマルション（第一工業製薬（株）製、製品名：Super Flex 700）を用いなかった以外は、実施例1と同様の操作により、電気泳動表示装置用マイクロカプセル（c3）の分散体を得た。

【0056】

この電気泳動表示装置用マイクロカプセル（c3）の粒子径を、実施例1と同様の方法で測定した結果、体積平均粒子径が66μmであった。

－比較例4－

実施例2においてアラビアゴムを6g用いるところを9g用いるようにし、カプセル殻体となるエマルション（第一工業製薬（株）製、製品名：Super Flex 300）を用いなかった以外は、実施例2と同様の操作により、電気泳動

表示装置用マイクロカプセル (c 4) の分散体を得た。

この電気泳動表示装置用マイクロカプセル (c 4) の粒子径を、実施例 1 と同様の方法で測定した結果、体積平均粒子径が $87\mu\text{m}$ であった。

〔マイクロカプセルの機械的強度〕

得られたマイクロカプセル (1) ~ (2) および (c 1) ~ (c 2) と電気泳動表示装置用マイクロカプセル (3) ~ (4) および (c 3) ~ (c 4) の分散体それぞれについて吸引濾過を行い、固形分約 40 wt % の濾過ケーキを得た。

【0057】

それぞれの濾過ケーキ 50 g に、固形分 35 wt % のバインダー（アクリル系エマルション、成膜温度 5°C ）6 g および水 17 g を添加し、塗料化した後、厚さ $250\mu\text{m}$ の PET フィルムにアプリケーターを用いて塗布し、30 分間風乾後、 100°C で 10 分間乾燥させることで、マイクロカプセルを塗布した MC フィルム (1) ~ (4) および (c 1) ~ (c 4) を得た。

次に、鉛筆硬度計（安田精機製作所（株）製）を用い、白色普通紙上にマイクロカプセルの塗布面を下にして上記 MC フィルムを置いた。その後、PET フィルム側から、7H の鉛筆を使用して荷重を 50 g、100 g、200 g、300 g と架けた各場合の、白色普通紙の青く染まる色汚染度を観察することで、マイクロカプセル (1) ~ (2) および (c 1) ~ (c 2) と電気泳動表示装置用マイクロカプセル (3) ~ (4) および (c 3) ~ (c 4) のそれぞれの機械的強度を、以下の基準により評価した。その結果を表 1 に示す。

【0058】

◎：染色無し

○：極わずかに染色有り

△：少し染色有り

×：大きく滲む状態の染色有り

【0059】

【表 1】

	マイクロカプセルの 粒子径 (μm)	機械的強度			
		50g	100g	200g	300g
実施例 1	67	◎	○	△	×
実施例 2	23	◎	◎	○	△
実施例 3	68	◎	○	△	×
実施例 4	95	◎	○	△	△
比較例 1	65	○	△	×	×
比較例 2	21	◎	○	×	×
比較例 3	66	○	△	×	×
比較例 4	87	○	×	×	×

【0060】

〔電気泳動表示装置の作製および画質評価〕

得られた電気泳動表示装置用マイクロカプセル (3) ~ (4) および (c 3) ~ (c 4) の分散体それぞれについて、体積平均粒子径の約 1.5 倍の目開きのメッシュを通過させて粗大粒子を除いた後、吸引ろ過して、各分散体から電気泳動表示装置用マイクロカプセルを得た。得られた電気泳動表示装置用マイクロカプセルそれぞれについて、以下の方法により、対応する電気泳動表示装置 (3) ~ (4) および (c 3) ~ (c 4) を作製した。

電気泳動表示装置用マイクロカプセル 100 部に対し、バインダー用アクリルエマルション 10 部の比率で配合し、固形分濃度が 40 重量%以下である塗工液を調製した。塗工液を ITO 付き PET フィルムにアプリケーターで塗布した後、90℃で 10 分間乾燥させ、塗布シートを得た。次に、この塗布シートに別途 ITO 付き PET フィルムをラミネートし、対向電極を有する電気泳動表示装置を作製した。

【0061】

電気泳動表示装置(3)～(4)および(c3)～(c4)それぞれについて、両電極間に30Vの直流電圧を1秒間印加した後のコントラストを測定した。コントラストは、マクベス分光光度濃度計SpectroEye(Gretag Macbeth社製)で青表示、白表示の反射率をそれぞれ測定し、その反射率比で表した(コントラスト=白反射率/青反射率)。これらの結果を表2に示す。

【0062】

【表2】

	画質評価		
	白反射率	青反射率	コントラスト
実施例3	20.8	3.9	5.3
実施例4	21.5	3.2	6.7
比較例3	19.7	4.0	4.9
比較例4	18.8	5.9	3.2

【0063】

【発明の効果】

本発明によれば、内包した液状物質のカプセル殻体からのブリードアウトの防止やその調整、および、マイクロカプセルの機械的強度の向上やその調整を、効果的かつ容易に達成することのできるマイクロカプセルを提供することができる。また、このマイクロカプセルを用いたシートおよび電気泳動表示装置を提供することができる。

【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 内包した液状物質のカプセル殻体からのブリードアウトの防止やその調整、および、マイクロカプセルの機械的強度の向上やその調整を、効果的かつ容易に達成することのできるマイクロカプセル、および、これを用いたシートならびに電気泳動表示装置を提供する。

【解決手段】 本発明のマイクロカプセルは、カプセル殻体に液状物質を内包してなるマイクロカプセルであって、前記カプセル殻体が粒子径 $1\ \mu\text{m}$ 以下の微粒子を含むことを特徴とする。また、本発明のシートは、本発明のマイクロカプセルとバインダー樹脂とを含んでなる層を有することを特徴とする。また、本発明の電気泳動表示装置は、少なくとも一方が透明な対向電極フィルム間に、本発明のマイクロカプセルが配されてなることを特徴とする。

【選択図】 なし

特願 2 0 0 3 - 0 6 0 5 0 0

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号

[0 0 0 0 0 2 3 6 9]

1. 変更年月日

1 9 9 0 年 8 月 2 0 日

[変更理由]

新規登録

住 所

東京都新宿区西新宿 2 丁目 4 番 1 号

氏 名

セイコーエプソン株式会社

特願 2 0 0 3 - 0 6 0 5 0 0

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号

[0 0 0 0 0 4 6 2 8]

1. 変更年月日

2 0 0 0 年 1 2 月 6 日

[変更理由]

住所変更

住 所

大阪府大阪市中央区高麗橋 4 丁目 1 番 1 号

氏 名

株式会社日本触媒